

「斑竹姑娘」の背景

奥津春雄

一 問題点の所在

「斑竹姑娘」を収載する『金玉鳳凰』という説話集の形式と内容が、チベット・蒙古の『シッディクル物語』を源泉とするものであること、そしてチベットにおける『シッディクル物語』の成立は、諸般の状況から十一世紀以降と推定されるから、「斑竹姑娘」が『金玉鳳凰』に密着したものならば、『竹取物語』と比較研究が可能なほど古い時代から存在したとは考えられないことなどを前稿⁽¹⁾において論じ、同時に、『シッディクル物語』から『金玉鳳凰』への改変は、田海燕の「搜集・整理」の段階で行なわれたもの、すなわち「斑竹姑娘」は田海燕による創作的再話である可能性が高いことをも述べた。今回はそれに加えて、その成立時期の漢・藏関係からの影響、及び『シッディクル物語』との共通話から推定される田海燕の「整理」(すなわち再話)の方法の二点を検討し、それらを視座として「斑竹姑娘」を見直した場合、どんなことが見えてくるかを考察することとしたい。そ

れによって、単に「斑竹姑娘」と『竹取物語』の間の源泉・影響関係の有無を検証するだけでなく、『竹取物語』求婚譚の意図と方法をより明確にすることが出来ると思うからである。

なお、『金玉鳳凰』の刊行は、益田勝実の整理によれば次の通りである。以下これに従い、() 内のように略称する。

1 一九五七年十二月刊『金玉鳳凰』 梓物語ほか12話 (第一次本)

2 一九六一年十二月刊一九六二年四月再刊『金玉鳳凰第一冊』 梓物語ほか41話 (第二次本)

3 一九八〇年十一月刊『金玉鳳凰』 梓物語ほか39話 (第三次本)

4 一九八三年五月刊『金玉鳳凰第二集』 梓物語ほか39話 田海燕・鶴燕共編 (第二集)

「斑竹姑娘」は第一次本に既に載っているが、『金玉鳳凰』としては第二次本を「正式印行」(第二次本「代序言」)としているから、これを中心に検討する。

二 『金玉鳳凰』の基本的発想

『金玉鳳凰』第二次本冒頭の「講故事、先作声明」(物語の前のお断り)を見ると、

不消説、神話畢竟只是希望的寄托、神仙仏道不可能真把世界屋脊上的冰川雪嶺、變成幸福樂園。只有在党的領導下、我們才能搬走压在人民頭上三座大山、讓奴隸成為掌管世界屋脊的主人。這是遠遠勝過神話和傳說的奇迹。……説实在話、西藏高原今天發生的事迹早已超出你的幻想了。(勿論、神話はただ希望の寄托に過ぎません。神仙や仏道は、世界の屋根の水川雪嶺を幸福な樂園に変えることはできません。ただ共産党の指導のもとでこそ、我々は人民大衆の頭にのしかかっていた三つの山(帝國主義・封建主義・官僚資本主義)を取り除き、奴隸が世界の屋根を管理する主人になるようにすることができました。これは神話・伝説をはるかに越えた奇蹟です。新しい社会で、多くの神仙を超える英雄たちがすでに生まれ、たくさんの素晴らしい物語が広まり、多くの雄大な建設計画がすでに始まっています。本当のことを言えば、西藏高原でいま起こっていることは、すでにあなたの幻想を超えたのです。)

とあり、続いて、いまチベットには語り尽くせないほどの新しい物語・新しい人物があるが、自分にはそれらを語る力はないから、『アラビアン・ナイト』にならって、ぼつぼつと『金玉鳳凰』の話をしようと思へ、さらに、(既に指摘されているように)自分

は原作に自由に手を加え、神仙・仏祖・国王などの権力者を讃えたり、人民を騙すと言ったような「荒唐」な説話を削って、有益で面白い話をすると言っている。そしてその目的は、読者たち(つまり中国の少年少女)が漢藏両民族の文化交流の関係を理解し、中国を構成する各民族の文化に興味を持つようになること、その結果、漢・藏両民族の友誼が深まり、両者の文化・伝説が交流することだとしている。

これが極めて重大な宣言であることは、本書の源泉となったチベット・蒙古の『尸語故事』、すなわち『シディックル物語』の冒頭部分と比較するとよく分かる。それは、

おお、御身、完全無欠なる智と徳の師よ！ 唯一無上のシヤールカムニに次ぐ師よ！ 御身、成就せられたるナーガールジュナよ！ 清淨無比のトリビタカ(三蔵)に親しく通達し、その中より、絶妙なるパーラミターを含蓄せる御身の賢明なるマドヤミカ(中観)を開発せし御身よ！ 御身の前に我は拜伏す！ 南無！ ナーガールジュナよ！ おお！ という「題寄」で始まり、続いて、

茲に物語ろうとする一連の説話は、同じナーガールジュナの助けと導きとによって為し遂げられた、賢良修行汗なる王者の摩訶不思議な功績の実録である。

このように『シディックル物語』はナーガールジュナすなわち竜樹菩薩に仮託し、その神通力を讃えるという発想によって語られている。この物語はチベットにおける十一世紀頃の仏教復興

の中で、その指導者であったインド僧アティシヤの一派によって成立したらしいとされているが、この語り口はその状況をよく反映している。また、この語り口は、『尸語故事』の更に源泉となったインドの説話集『屍鬼二十五話』の、屍鬼(ヴェーター)の神通力を讃えるという発想を受け継ぐものであるとともに、田海燕がそれに倣ったという『アラビアン・ナイト』の、「これアッラーの御意なり! 寛仁にして慈悲深きアッラーの御名において!」(6)「げにアッラーは慧く賢く力あり情けあり、われわれの思い及ばぬものではある。」というような言葉で始まる発想とも共通なものであるが、『金玉鳳凰』はこれらと全く対極的で、宗教的(見方によれば迷信的)なものや社会的権威を積極的に排除する合理性と民衆重視の姿勢を持ち、最終的には、共産党の指導の下に漢・藏両民族の融和と交流をはかることを目的としている。

一例を挙げれば、物語の中心となるものが、『屍鬼二十五話』では、人の骨粉で地に曼陀羅を描いて人血を注ぎ、人の脂肪の灯明をともし真言を唱えて屍体の中に招き降ろすと、屍体に憑いてこれを動かすヴェーターという鬼神であり、『シツディクル物語』では、無数の嬰兒の屍体の中に隠れている、上半身は黄金下半身はエメラルド、頭は螺鈿という姿で、竜樹菩薩が衆生に智恵と長寿と果報をもたらす手がかりとなる屍体であるのに対し、『金玉鳳凰』では、上半身は黄金、下半身はエメラルド、花冠を戴き、花屏風のような尾を持つ、いわば孔雀とガルーダを併せたような姿で、王子に道徳を説き、後その国師となる神鳥となっている。こうした点から見ても、『金玉鳳凰』の合理性・教訓性・

反宗教性は明らかである。田海燕が上記の文章の中で、自分の「好悪」によって添削を加えたので、必ずしも原作の面影を保持し得てはいないといっている、その「好悪」の内容はこのようなもので、『斑竹姑娘』もこの姿勢で再話されたものであることを知らなければならぬ。

三 時代の状況

『金玉鳳凰』のこうした発想は、勿論人民中国以後のものである。前述の刊行年月を見ると、第一次本・第二次本の出版は中華人民共和国の成立後、文化大革命までの間にあり、第三次本はその終結後になっている。第三次本の「前記」には、この間、我が国(中国)は「驚心動魄的」大災禍に見舞われ、雲南サニ族の「阿詩瑪」・チベット族の「格薩尔」(ケサル王伝、蒙古ではゲセル汗物語)などの著名な叙事詩さえ批判の対象となり、『金玉鳳凰』も又、「階級調和」や「人性論」を宣伝する毒草として出版不能になったと述べている。このことは、『金玉鳳凰』その他の民話・民謡の取り扱いが、中国現代史の流れに沿って動いて行ったことを示しており、従って『金玉鳳凰』の編集方針や再話の方法も、中国のチベットに対する、当時の政治的状況に即応したものであったことを思わせるのである。

そこで、中華人民共和国成立以後の中国・チベットの関係を概観すると、次のようになる。(7)

チベットは、吐蕃と呼ばれていた古代には、唐の都長安を一時占領した程の強大な軍事国家であったが、元・明・清・中華民国

の時代には、ようやく半独立の状態を保つに過ぎなかった。中国共産党は、一九四九年、中国本土を掌握後チベットの解放を宣言、一九五一年にはガブール等のチベット代表を北京に呼んで十七条平和解放協定に調印させ、同年九月ラサに進駐、五四年にはダライ・パンチェン兩ラマを第一回全人代に出席させ、翌五五年金沙江以西（旧来のチベット中・西部）を自治区とし、以東を四川省・青海省に組み込む形で中国領土の中に位置づけ、民主改革を行なうため、準備委員会設立をダライ・ラマに承認させた。田海燕が六一年刊の第二次本の「代序言」で、一九五四年の春、チベット代表団を送って三峽を過ぎた時、『金玉鳳凰』の基となった民話の採集を始めたと言っているのはこの時期のことである。

しかし、五六年、西藏自治区籌備委員会は発足したものの、いわゆる封建勢力（三大領主すなわちチベット地方政府・寺院・貴族）の抵抗によって容易に進まず、毛沢東の指示で強力な促進を図ることになったのが五七年、『金玉鳳凰』第一次本はこの年に刊行されている。この後、この改革促進に対して五八年には各地に反乱相次ぎ、五九年三月のラサの大反乱となるが、中国人民軍は数日にしてこれを制圧、チベット地方政府を解散させ、六五年西藏自治区成立に至る。第二次本はこの間（一九六一年）に出版されている。

この経過からも分かる通り、田海燕がチベット民話の採集に手を染めてから『金玉鳳凰』第二次本の刊行に至るまでの中国・チベット関係はけっして平坦な道ではなかった。それは、仏教王国であり、独立を主張しているチベットに対して、中国人民政府が

宗主権を主張し、解放と民主改革を強力に押し進めた時期であった。従って、前述の「講故事、先作声明」の文章は中国側から見た勝利の宣言であり、その末尾の、漢・藏両民族の理解と友誼を深めようというものは、力による実効支配を達成した後の精神的融和への志向を示すものと理解することが出来る。

こうした政治的段階において民間伝承の整理と利用が極めて重要であり、効果的でもあることは言うまでもない。『古事記』編纂などもこうした意図に基づくものであったわけだが、中華人民共和国においても同様で、建国の翌年一九五〇年には「中国民間文芸研究会」が結成され、民話・民謡・民間芸能を全国的・全面的に採集し、重点的に整理する運動が展開されたと村松一弥は報告している⁽⁹⁾。村松は又、一九五八年に北京で開かれた全国民間文学工作者大会の討議・決定についての資料によって、

重点的な整理というのは、全面的に採集された民間文学資料を、科学研究の資料に使うものと、文学読物にするものとはっきり区別し、活字にして公刊する文学読物候補としての民間文学資料には、十分な検討を加え、精華をとり、糟粕を捨てることである。こうして、公刊された文学読物作品としての民間文学は、民衆の思想感情を反映した自己教育の道具、敵と戦う武器と考えられているのである。

と述べている。『金玉鳳凰』にもこの考え方が一貫して流れており、「講故事、先作声明」はそれを具体的に述べたものと見るべきであろう。

四 田海燕の再話の方法

前稿にも述べた通り、益田勝実は、『金玉鳳凰』の源泉がチベットの『尸語故事』であるとすると、田海燕の言葉を紹介している。すなわち第二集の共編者である田海燕が、その後記の中で、

「金玉鳳凰」はチベットの大形民話「若鐘」に基づき、書き改めて（改写して）出来ている。「若鐘」はチベット語で、「若」はすなわち屍体、「鐘」はすなわち説話、直訳すれば『尸語故事』である。」

と言っているというのである。紙幅の関係で詳しい説明は省略に従うが、この『尸語故事』の蒙古系の伝本とおぼしきものが、一八六八年ユルクタによって翻訳出版され（梓物語十十三話）、これをもとに加筆増補したものが、バスクによって一八七三年に出版された。バスク本の第一話―第一三話は、多少の表現の相違を除いてユルク本と全く同じである。この一三話と『金玉鳳凰』第一次本の一二話を比べると、六つの共通話が認められる。第二次本の四一話でもこの共通話は増加せず、見ようによって類話と言えは言えるものが一話増えるだけであるから、あるいはユルク本系の『尸語故事』が『金玉鳳凰』の主要な素材となったのかも知れない。いま、吉原公平訳により、『金玉鳳凰』との共通話を列挙すれば、次の通りである。

- 9 『金玉鳳凰』（第二次本）
- 銀鳥和牧羊女（3）
- 如意宝（10）
- 7 白い鳥とその妻
- シリカンタの幸運

- 16 吐金玉的故事（5）
 - 2 吐金王子
 - 23 懶丈夫闖世（4）
 - 4 豚頭の占師
 - 25 一个和国王同名的人（6）
 - 12 童子賢者と活仏賢者
 - 28 六朋友和大鵬金翅鳥（7）
 - 9 一人に五人
- （数字は説話の配列順序。（ ）内は第一次本）
- これらと比較してみると、『金玉鳳凰』の諸話は、『蒙古シッディクル物語』に比べて、
- 1 善玉と悪玉が峻別されている。
 - 2 主人公は概して、人を騙さない、無欲・廉潔である、正義を行なり、不屈の抵抗精神を持つ等、道義的性が著しい。
 - 3 そうでない主人公、または主人公側の人物は、後に道義的性格に変わる。（怠け者の夫が勤勉・聡明になる等）
 - 4 女性は優れた能力を持ち、夫や愛人に純愛を捧げる。
 - 5 権力者・富者は、悪人であるか、または悪人化され、敗者となる。（昏王・奸商などの表現が多い）
 - 6 主題的統一のため、一部の挿話が省略される。
 - 7 数字的表現への志向が強い。（八本角の竜の次に十二本角のむかだが襲いかかる等）
- などの特徴がある。このうち1・2・3・5は前述の基本的発想、特に「講故事、先作声明」の方針の具体化であり、4はよく知られた人民中国以後の女性重視の考え方であるし、6は、前稿でも引用した董均倫・江源の民話整理の基本的方法の第二「話全体は悪くないが一部分の筋立てに問題がある場合は、その原型をそこなわなない範囲内で、主題が鮮明になるように手を加える」と同じ

である。しかも、この六話はすべて、話末に語り変えや追加がある。話末が変わるということはほとんどの場合主題の変更につながることであり、そのうえそれが追加の形で行なわれているとなるとき、『金玉鳳凰』が先で、その追加と見える部分を削除して『尸語故事』が成立したという可能性はまずないと言ふことになる。以上を総合して見ると、『金玉鳳凰』のこれらの話は、『蒙古シディクル物語』（またはこれに類する『尸語故事』の諸伝本）の諸話に、人民中国の少年児童の教育に役立つような改作を加えた、創作的再話であろうと考えるほかはない。上記六話の全体を解説することは、紙幅の関係で困難であるが、典型的な話末の変更の場合を、以下に例示してみよう。

まず「銀鳥和牧羊女」と「白い鳥とその妻」であるが、原話と思われる「白い鳥……」の筋は次のようである。

三人姉妹の末娘が、見失った山羊を取り戻して貰う代わりに、籠に入った白い鳥の妻になる。鳥は実は人間の男で、彼女は夫にずっと人間でいて貰うために、ある老婆に教えられて、夫の留守中鳥籠を焼いてしまう。鳥籠には夫の魂が入っていたので、夫は魂の抜け殻となる。彼女は七日七晩扉をたたき続け、打ち破ることによって、神々と悪魔から夫を取り戻そうとするが、七晩目について片目をつぶってしまつて失敗する。夫を捜し歩いた彼女はついに巡り会い、夫の教えにしたがって、鳥籠を復元し、そこへ夫の魂を請じいれることによつて、夫を神々と悪魔から解放し、二人は幸福に暮らす。この話では、鳥籠を復元して夫を取り戻すというのが結末であ

るが、「銀鳥和牧羊女」では、これが、次のように極めて長大で教訓的な物語となっている。⁽¹⁵⁾ すなわち、

夫である白衣王子は自分の賢さを自負し過ぎ、親友の善魔の機嫌を損ねたので、危険にあつても助けにきてくれない。また正直で、至るところで悪魔のやり口を暴いたので、悪魔に呪われて白鳥に変えられ、命が鳥皮に宿るようになされたという設定であるが、巡り会ったとき夫はナーマ（末娘の名）に、「あなたは邪が正に敵せずという道理はもう知っているね。あなたが、正義と愛情の歌を三百編うたいさえすればよい。同時に三百種の善鳥の羽毛をさがし、百鳥宝衣を織り上げるのだ。そうすれば悪魔は、正気の歌声の中に次第に弱つてゆく。最後にあなたは右手で珍珠門の朱環を二度たたくのだ。わたしの友善魔はその時すでに傷がなおり、悪魔を征服してくれるはずだ。」

と教える。ナーマが自分の編んだ三百篇の愛情の歌を歌うと、鳳凰が諸鳥を連れてきて、一片ずつ羽毛を落としてくれたので百鳥宝衣はすぐ織り上がり、悪魔は歌声の力に負けて次第に弱る。悪魔が山頂で休んでいるところへ、鳳凰が百鳥宝衣をかぶせると、悪魔は縛られたように感じ、住処に駆け戻るが、白衣王子が門を閉ざし、善魔が飛び出してくる。悪魔が逃げ出すと、金翅鳥や諸鳥が攻撃、ナーマが悪魔の胸を開いて肝を取り出し、善魔が狂風で悪魔の屍体を粉々に吹き飛ばす。するとあたりは明るく輝かしい都と変わり、白衣王子とナーマは国王・妃として迎ええられる。そして「白衣王子は、

人びととナーマの助けによって、自分の過ちを悟って、もと通り生きかえったので、善を尊び、悪を憎み、天下を太平に、人民を安らかに治めることにはげみ、幽谷を開放して人も物も花も鳥も「皆思ふ存分歌い踊って楽しんだ。以前、山羊を見失ったとき、娘たちをさんざんに鞭打ち追い出した冷酷な老父は、自分が利己的で愚かであり、娘が善良で忠実正義であることを悟る。白衣王子とナーマは老父を宮殿に招いて三日三晩の大宴会をし、二人の姉も気の合った夫を得た。

〔一〕内は引用、他は要約)

このように、白衣王子は勇氣に満ちて正義を守り自分の過ちは深く反省する人物であり、ナーマもまた愛情と不屈の精神をもって夫を助ける。全員の協力で悪魔を倒し、めでたしめでたしで終る。教訓的と言うよりむしろ勸善懲惡的と言うべき結末となっている。なお、この「老父」は、「白い鳥……」では、冒頭に「三人の娘を持った人が住んでいた」と述べられるだけで、以後全く登場しないから、冷酷凶暴な老父が娘の影響で改心するというのも、女性重視のための語り替え、または追加であろう。

このような加筆・語り替えは、六話すべてにあるので、一貫した再話の方針と思われるが、もう一つ特徴的な例として、「六朋友和大鵬金翅鳥」を取り上げてみよう。

〔一人に五人〕あらずじある強大な汗国に親しい六人の若者がいた。鍛冶の子、木彫師の子、絵師の子、医者の子、勘定方の子、これと言って手に職はないが金を持っている富豪の子である。六人は職を求めに旅に出、六筋の川の合流点

で、自分の選んだ川の岸に一本ずつ木を植えて別れた。富豪の子は上流で老夫婦と美しい娘に逢い、結婚する。妻が宝石の指輪を川に落したのもとで、妻の美しさをその国の汗に知られ、妻は奪われる。富豪の子は生き埋めにされ、上に大岩を載せて殺されるが、やがて合流点に戻った五人は、富豪の子の木が枯れているので彼の災難を知り、助けに行く。まず、勘定方の子が算を立てて富豪の子の所在を占い、鍛冶の子が岩を砕き、医者の子が薬を飲ませて生き返らせる。ついで木彫師の子が自由に操縦できるガルーダ鳥を作り、絵師の子が彩色を施す。富豪の子はこれを操縦して、汗の宮殿の屋根に降り、后となっていた妻を連れ帰るが、その美貌に五人の友も夢中になり、全員で妻を奪い合った挙げ句、彼女を切れ切れに引き裂いてしまった。

これに対し、「六朋友和大鵬金翅鳥」では先の基本的発想から予想される通りの改作が行なわれている。まず、これといって技能のない金持ちは人民の敵であるから、富豪の子は若くて勇氣と指導力に富む永丹王子に替えられる。算術は卜占の術であり魔術であるというのがむしろ古代的なのだが、現代には通じにくいと思っただのか、直接的な魔術師となる。美しい娘は老夫婦の子ではなく、魔法のルビーの指輪をして突然現われた仙女で、一言も口をきかなかったのある日初めて口をきき、「明日は老夫婦のためによいお婿さんを連れて来る」と言って永丹王子を連れ帰り、結婚する。つまり娘の方に主導権が移っているのである。ある日、魔法の指輪を川に落し、それが隣国の王の手に入って、軍隊が彼

女を奪いに来る。妻は指輪がないため夫を守れず、永丹王子は勇ましく戦うが捕らえられ、大石盤とともに竜が淵に沈めて殺される。妻は必死で王を拒み操を守る。五人の友が救出に当たたる場面では、魔術師の登場のため、筋はむしろ不自然な展開を見せる。

最初、魔術師の子が、植えた本人に不幸があると木が枯れるように魔法をかける。永丹王子の災難を知ると、魔術師の子がその所在を透視し、さらに竜が淵の老竜を呼び出して永丹王子を岸に揚げさせる。このあと、大工の子（これはここで初めて登場。構成上のミスであろう）が椽の木で大鳥を作り、彫刻師の子が細工をし、絵師の子が色を塗って大金翅鳥とする一方、魔術師の子が隱身の術で王宮に忍び込み、魔法の指輪を奪って永丹の妻に与え脱出の計画を伝える。しかし、これだけのことが出来るのなら、救出は魔術師の子一人でやれそうである。勘定方から魔術師への改善がこの不自然さを生んだと見るべきであらう。「二人に五人」の方は、一人が一つずつの能力を持ち、それが組み合わされて一つの仕事を完成させると言うパラメータが保たれている。

話末は勿論、妻をずたずたにして殺してしまつたなどと言うこととてよいはずはなく、当然語り替えられており、しかも興味ある変化を見せている。まず、『金玉鳳凰』の原文では、次の通りである。（一部は要約）

大鵬鳥が近づくと、永丹の妻はひらりとそれに乗り移る。国王は弓手に射撃を命ずるが、かえって永丹に剣を投げつけられて殺される。大鵬鳥は永丹と妻を載せて竜が淵に飛び降り、二人は五人の友と出会う。老竜は彼ら一同を故郷へ送り

届け、それから自分は竜が淵へ帰って行った。

つまり、原話の、自分こそ女の所有者たるにふさわしいと奪い合つて、ついに妻を殺してしまう部分を削除して、一同仲良く国へ帰つたと語っているわけで、友情をテーマとするこの話では必要な語り替えである。しかしこれでは、異種の技能を持つ五人も友人が登場することの意味がはつきりしなくなり、落ち着きの悪い結末となっている。この話末に少し重みを加え、多少バランスのよい形に仕上げたのが、実は君島久子の翻訳である。その結末は次のようになっていゝ。（訳者は国王が殺される部分を削除している）

永丹の妻が大鵬鳥に乗り移つたところで、金玉鳳凰は不意に口をつぐむ。大王子が先をせかすと、

鳳凰はまたハハハと笑つて、

「もちろんですとも、永丹には大きな鵬鳥があるし、美人には魔法の指輪があります。かれらは順調に竜が淵に飛び降り、五人の友と老竜を載せて国へ帰りました。そののち、五人の友は大臣となり、竜は保国竜君の位をもらつて、ずっと平和に幸せにくらしたという事です。」

鳳凰は王子の輝く瞳をみやりながら、

「このようにみると、友情は王室の権威よりもさらに重要だということがわかります。ところで王子、あなたはこの道理がおわかりになりましたか。また雪山隠士のいましめを忘れ、なせ口をおききになって、わたしを飛ばしてしまうのでしょう。」

と言ひ、王子が再び金玉鳳凰を捉えに行くこととなる。

右のうち、傍線部は『金玉鳳凰』の原文にない部分、つまり君島久子の補筆した部分である。ここでは、五人の友人と老竜とが、将来にわたる協力者として王子の宮廷を支えることになったところまで語っており、友情をテーマとする永丹王子の冒険物語は完結したことになると言う意味で、パランスの取れた構成と言へる。君島久子は、翻訳に当たり、本来の連環説話の形式に戻すため手を加えたと言う趣旨をあとかぎで述べているが、結果的には田海燕の発想に沿って、その再話にさらに創作を加えたものとなっている。

しかし原話のテーマは実は友情ではなく、富豪の子の妻の救出に誰が最も功績があったのか、言い替へれば、救出された女性は誰に帰属すべきものかと言う争いにあるのである。これは『尸語故事』の源流とされる『屍鬼二十五話』にも「娘一人に婿三人」「王女と四人の求婚者」などいくつも例のある話型で、さらに拡大すれば、善悪いづれの事件についても、第一の功勞者、第一の責任者を判断させる話のパターンである。従つてこの話は、インド伝来の話型に属する原話を友情を讀める話に作り替え、しかも主人公は凛々しく勇ましく、女主人公は貞潔で優しく美しい仙女として設定した、創作的再話と考えられる。だからこそ上述の要約のように、魔法の指輪は事実上ほとんど機能せず、女主人公の仙女的性格や能力も一貫しないものとなっているのである。

五 結語——「斑竹姑娘」に関する推定

以上、『金玉鳳凰』の再話は、当時の中国・西藏関係の中で、勸善懲惡を目指し、民衆の代表としての主人公の道德性と勇氣を讃え、民主改革を妨げる封建勢力に対する抵抗精神を強調する方向で行なわれていることを見てきた。そこでこれが「斑竹姑娘」にどう現われているかを見るのだが、紙幅の関係で、求婚譚の問題、特に求婚者の構成についてだけ述べることにする。

「斑竹姑娘」の話末は、「斑竹姑娘はランバと夫婦になった」と言う一文である。従つて先の「一人に五人」の場合と同じく、その前、すなわち五人の求婚失敗の部分に主題があると考えられ、『竹取物語』の場合のように主題の分裂を感じさせる要素は全くない。この主題部の求婚譚については、『竹取物語』との内容の類似とともに、求婚者の類似も主張されている。いま求婚者を列举すると次の通りである。

「斑竹姑娘」(難題)

『竹取物語』

土司の兒子(金鐘)

石作の皇子

商人的兒子(玉樹)

車持の皇子

官家的兒子(火鼠皮袍)

阿部の御主人

驕傲自大的少年(燕子金蛋)

大伴の御行

胆小而喜歡吹牛的少年(海竜分水珠)

石上の麻呂

これについて、土司は領主だから、領主の子||天皇の子|| (石作の)皇子、商人は金持だから、蔵持ち||車持、官家は役人だから、役人||右大臣||阿部の御主人、というような形で類似を言

うのは強弁であって、たいへん疑わしい。右大臣が役人なら、大伴大納言も石上中納言も役人である。上述のように、基本的発想に従って、富豪の子を永丹王子に替え、老夫婦の娘を魔法の指輪を持った美しい仙女に替えるようなことは自由に行なった再話者が、ここでだけ原話の人物設定に固執するはずがない。はっきり言えばこの両グループは、五人という数以外似ていないのである。『竹取物語』には平安初期の世相に対する風刺があり、「斑竹姑娘」には封建社会を改革しようとする攻撃的精神がある。土司は元の時代以来、中央政府から認められて地方長官をつとめる土侯であり、商人は富豪だから、勿論農民を搾取するもの、官家は役人には違いないが、天子・政府・おかみなどの意の言葉だから権力を笠に着た体制側の人間、つまりいづれも、「時代の状況」の中で前述した、改革を邪魔する封建領主たちを意味している。

あとの二人、うぬぼれの強い威張り屋、小心な癖に人を騙す人間と言うのも古い権力にあぐらをかく連中への悪口で、前の三人と同じことである。このように同種の人間を攻撃の対象にしているために難題が『竹取物語』と逆に組み合わせられてもさして問題にならなかつたのだと思われる。『金玉鳳凰』中の他の説話、例えば「救白蛇」の中で狩人が竜王に自分の心意気を述べる歌の歌詞にも、「不入官家門」とか「富人欺窮漢 个个是畜生」などの文句がある。「斑竹姑娘」はこうした封建勢力を打倒して改革を実現して行く民衆の力を誇示しようとする話である。だからランパは山鷹のように英俊で、斑竹姑娘は牝鹿のように美しい天女だと語られるので、この設定は永丹王子とその妻にそっくりである。

そして、性格的に重複する部分の多い人物設定であるのに、それでも求婚者が五人であるのは、『竹取物語』求婚譚の影響を受けたか、あるいはそれを素材として構想されたためではないかと思われる。『竹取物語』の五人はそれぞれ性格が異なり、それが求婚失敗のあり方と深く関わっているのに、この話にはそれがなく、しかも細部のお膳立てのみ完全に近く一致していることがそう思わせるのである。

(注) (1) 奥津春雄「金玉鳳凰と屍鬼二十五話」徳島文理大学『文学論叢』第六号 平成元年3月

(2) 益田勝実「『斑竹姑娘』の性格——『竹取物語』とのかかわりで——」『法政大学文学部紀要』第88号昭和63年3月

(3) 芳賀繁子「『竹取物語』研究における『斑竹姑娘』の非資料性」『中古文学論攷』第八号 早稲田大学大学院中古文学研究会 昭和62年12月など

(4) 吉原公平訳『蒙古シッディクル物語』ぐろりあ・そさえて 昭和16年2月刊。この本は R. H. Bask: Sagas from the Far East; or Kalmouk and Mongolian Traditionary Tales. London 1873 の全訳である。以下、本スク本と称する。『シッディクル物語』の引用は本書による。

(5) R. A. Stein 著 山口瑞鳳・定方晟訳『チベットの文化』岩波書店 昭和46年10月刊の説による。

(6) 豊島与志雄他訳 岩波文庫『完訳千一夜物語』1 昭和63年7月刊

(7) 主として山口瑞鳳『チベット』下 東京大学出版会 昭

和63年3月刊に拠った。

(8)(9) 村松一弥編『中国の民話』下 毎日新聞社 昭和47年11月刊

(10) 注(1)に同じ。

(11) 注(2)に同じ。

(12) B. Jürg: Kalmückische Märchen. Die Märchen des Siddhi-kuir od. Erzählungen eines Verzauberten Todten

.....übers. Lzg. 1866.

ここでは渋沢青花訳『北方民族(上)の民話』(アジアの民話3)大日本絵画 昭和53年11月刊の訳による。

(13) ↓注(4)

(14) 飯倉照平・鈴木健之編訳『山東民話集』(東洋文庫) 平凡社 昭和50年7月刊 解説(飯倉照平)

(15) 以下、『金玉鳳凰』の訳文は田海燕編・君島久子訳『チベットのものいう鳥』岩波書店 昭和52年4月刊。ただし、君島久子の補筆の部分が必要に応じ原文に拠った。

新刊紹介

岡保生著

『明治文学論集1』

——硯友社・一葉の時代——』

『明治文学論集2』

——水脈のうちそと——』

本書は新典社研究叢書27・28として刊行された。論集1は紅葉及び露伴、柳浪、鏡花、風葉、一葉に関する論文を収める。紅葉と露伴の資質の違い、明治二十年代初期から日清戦争後にかけての硯友社の動向、「金色夜叉」に影響を与えた諸作品、大正・昭和期の露伴の思想などを考察する。特に「金色夜叉」塩原の章については、その

美文調のもととなった資料を発掘、紅葉の作法を解明する。また、柳浪の年譜の問題点や作家としての誕生を、鏡花への紅葉からの影響や文壇での位置、「冠弥左衛門」「高野聖」「春昼」成立の基盤と背景を、風葉の代作問題や「恋さめ」の原稿からの資質、創作過程の追求、「世間師」の成立の過程を、一葉の日記「若葉かげ」の注釈や『文学界』との拘り、「ゆく雲」「十三夜」の分析、一葉の作品に見られるユーモアや洒落本との関係を扱って、それぞれに論を展開する。論集2は著者の広範囲な論文から主要なものを、扱った対象の年代順に編んでおり自ら著者による近代文学史という形になっている。政治小説や日清戦争

時のナショナリズム文学、逍遙・天溪・抱月の文学観、幽芳・北星・霞亭の家庭小説、岡鬼太郎の思想、漱石の初期の小説や「千鳥」「土」、空穂や吉田弦二郎の小説などを考察し、また、『文壇照魔鏡』の作者、風葉、葉舟の発禁本の実態を究明、花袋の作品から国男や独歩との交流を解明する。いずれも文壇・社会状況への深い理解に基づき、大衆文学と一括されて等閑視されがちな作家にも焦点が当てられ貴重である。巻末には、著者の著作目録が収められ、研究の足跡をたどることができる。
(1) 平1・5 四三〇頁 一〇三〇〇円、
2 平1・9 四三〇頁 一〇三〇〇円、
新典社 A5判) [市川祥子]